

# 頭ヶ島の開拓者たち

阿部律子

## はじめに

1858年、アメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスなどの欧米列強と日本との間で安政の5カ国条約が締結された。翌年には神奈川、長崎、箱館が開港され、居留地が設置された。国内ではキリシタン禁制が続く中、在留外国人に対してはキリスト教信仰が許可されると、キリスト教各派の宣教師たちが相次いで来日し、居留地を中心に活動を開始した<sup>1)</sup>。カトリック関係では、イエズス会に代わり、17世紀後半以降東南アジアへの布教を積極的に展開していたパリ外国宣教会<sup>2)</sup>の宣教師たちが来日した。彼らは当初から幕府の厳しい取り締まりを逃れて潜伏するキリスト教徒たちが九州にいるのではないかと考えていた<sup>3)</sup>。

1863年1月(文久2年12月<sup>4)</sup>)にルイ＝テオドール・フュレ神父が、同年7月にはベルナル＝タデ・プティジャン神父とジョゼフ＝マリー・ロケーニュ神父が長崎に派遣されてきた。彼らは直ちに教会堂の建設に着手し、1865年2月(元治2年1月)に大浦天主堂が完成した。ゴシック風の尖塔が特徴的な教会堂は長崎の人々から「フランス寺」と呼ばれた。日本人への布教は許されていなかったが、フランス人神父たちは、旧信徒の子孫が現れる日を心待ちに日々過ごしていた<sup>5)</sup>。そして、献堂から間もない同年3月17日(元治2年2月20日)、見物人を装って天主堂を訪れた浦上の十数名のキリシタンたちは、そこで7代待ち焦がれた外国人司祭<sup>6)</sup>を目にしたのである。これが浦上信徒とプティジャン神父との奇跡的な出会い、

「キリシタンの復活」の瞬間であった。そして、長崎に外国人のカトリック司祭がいるとの知らせを受けた外海、天草、平戸、五島、福岡の今村などのキリシタンたちが大浦天主堂を訪れ、信仰を告白した<sup>7)</sup>。上五島桐ノ浦のガスパル与作も姿を現した。翌1866年(慶応2年)になると、久賀島、奈留島の夏越、頭ヶ島、福江島の水ノ浦などのキリシタン集落の指導的立場の者たちが五島から長崎に渡り、プティジャン神父から受洗した。こうした動きを受けて、翌年にはジュール=アルフォンス・クーザン神父が五島に派遣され、鯛ノ浦のドミンゴ松次郎と協力して、頭ヶ島などで積極的に宣教活動を行った。クーザン神父はその後何度も五島を訪れてはキリシタンの発掘に尽力した<sup>8)</sup>。

だが、キリシタンたちによる信仰表明と、仏式葬儀の拒否と自葬の申し出は、キリシタン弾圧につながっていった。しかしながら、信仰を理由とした弾圧は、プティジャンなどのキリスト教関係者からの抗議に留まらず、欧米諸国の駐日外交官たちからも本国へ伝達され、やがては国際問題へと発展していった。明治新政府は国際世論に抗することができず、1873年(明治6年)2月24日ついにキリシタン禁制の高札を撤去したのである<sup>9)</sup>。

当時およそ6,000~7,000人<sup>10)</sup>いたとも言われる五島列島のキリシタンたちをカトリックに復帰させるために、パリ外国宣教会の神父が再び五島に派遣されたのは、高札の撤去から4年後の1877年(明治10年)3月2日のことであった。だが、長崎から五島に渡ると言っても、明治初期のこと、漁師が漕ぐ小さな漁船で100kmを超える五島灘を渡るのは至難の業であり、時には何日もかかった。時化の時などは命を賭して渡らなければならなかった。この時、上五島鯛ノ浦の地を踏んだのは、32歳の若くて有能なピエール=テオドル・フレノー神父であった<sup>11)</sup>。だが、彼が目当たりしたのはキリシタンたちの悲惨な状況であった。多くのキリシタンたちが弾圧を受けていた。拷問のために死に至った者もいた。拘留を解かれて家に戻ってみれば、粗末な家は破壊されたり、家財道具が盗まれたりしていた。食う物にも事欠いていた。元来貧しかった彼らは一層の貧困を余儀なくさ

れ、病人も相次いだ。フレノー神父はこれらの貧者や病人の世話をするために五島列島を駆けずりまわって救済にあたった。病人を見舞い、死ぬ間際の者に対しては終油の秘跡を授けた。カトリックへの復帰を希望するキリシタンたちに対してはその告白を聴き、聖体の秘跡を授けた<sup>12)</sup>。

このようなフランス人神父の活動とキリシタンたちの状況を示すものとして、洗礼台帳（洗礼簿とも言う）が残されている。洗礼台帳とは、キリスト教徒にとってはいわば戸籍簿に相当するものであり、地区、洗礼日、出生地、洗礼名および名前、生年月日、両親の洗礼名及び名前、双方の祖父母の洗礼名及び名前、各人の出生地、抱き親（代父、代母とも言う）の洗礼名及び名前、授洗者名、洗礼場所などが詳細に記録されている。旧網ノ浦教会には1878年から1880年までの手書きの上五島地区の洗礼台帳2冊（洗礼台帳、 ）が残されていることが判明した<sup>13)</sup>。また、1880年以降第二次世界大戦までの上五島地区の洗礼台帳（洗礼台帳、 ）は青砂ヶ浦教会に残されている<sup>14)</sup>。洗礼台帳、 は手書きであるが、洗礼者数の急増を受けてか、以降は各ページに記入事項が事前に印刷された台帳が使用されている。初期の2冊の洗礼台帳は歴史的重要性が認識されず、しか

写真1 洗礼台帳 表紙

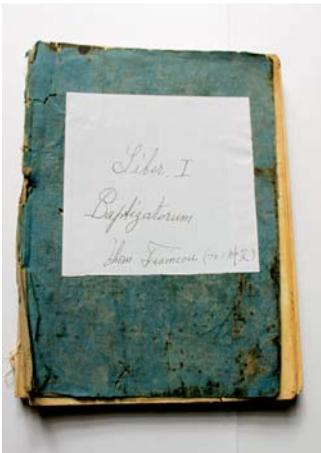


写真2 洗礼台帳 表紙



るべき保存もなされていなかったために、写真1、2で示すように、湿気と虫食いで傷みが著しい。また、洗礼台帳 以降も、1900年以前のもものとなると、写真3及び4で示すように、やはり湿気と虫食いなどでかなり傷んでいる。

本論文は、頭ヶ島に入植した開拓者たちがどのような経路をたどって頭ヶ島に到着し定住していったのか、また彼らはどのような家族構成や姻戚関係であったのか、洗礼台帳 、 、 をもとに、その特徴を示すことを目的とする。

写真3 洗礼台帳 表紙



写真4 洗礼台帳 裏表紙



## ．頭ヶ島への入植

頭ヶ島は無人島であった。いつ頃からこの島に人が住み着き始めたのかは定かでない。『鯛ノ浦小教区史 鯛ノ浦教会献堂100周年記念』には、仏教徒であった前田義太夫が当時無人島であった頭ヶ島の開発を思いつき、代官貞方数右衛門の許可を得て、1858年（安政5年）10月に、信者たちよりも先に一家をあげて入植したとある。また同書には、この前田義太夫なる人物は、久賀島出身であったが、兄長次郎が有川鯨組の組支配を藩から命ぜられて有川に来た際に随行し、後に有川の前田伝次郎の養子になった

とも書かれている<sup>15)</sup>。浦川和三郎はその著書『五島キリシタン史』の中で、この前田義太夫を小頭役の足軽としている<sup>16)</sup>。ところが、『五島編年史』では、「(明治3年)春、前田儀太夫正義、有川頭ヶ島に於いて開墾に着手す<sup>17)</sup>」とあり、頭ヶ島の開発は『鯛ノ浦小教区史』が主張する江戸末期ではなく、明治初期としている。これに対して浦川は『五島キリシタン史』の中で、有川の代官貞方数右衛門の許可を受けて鯛ノ浦のキリシタン2、3戸がはじめて頭ヶ島に移住し、次いで1864年(元治元年)に5戸が移住してからは、跡を追って引越す者が多くなったとしている<sup>18)</sup>。つまり、頭ヶ島は、前田儀太夫が開発した島ではなく、当初からキリシタンが開発した島と見なしているのである。また、浦川は、1867年(慶応3年)に家老職奈留勘解由や頭ヶ島の大目付貞方彌兵衛等が調査した時には、16戸130名を数え、クーザン神父が渡った頃には25戸に達していたとも記している<sup>19)</sup>。このように頭ヶ島を最初に開拓したのは前田儀太夫なのか、キリシタンなのかは不明である。

頭ヶ島には上五島随一のキリシタンの頭目ドミンゴ森松次郎が鯛ノ浦から移住したことはよく知られている。浦川によると、松次郎は父の代に黒崎村出津の浜郷から鯛ノ浦に移住し、紺掻(染屋)を生業としていたという。彼は仕事の傍ら俳句や和歌を詠んだり、絵筆を握ったり、田舎にしては珍しい物知りであったという<sup>20)</sup>。平成6年編の『有川町郷土誌』には、文化期(1804~17年)にはすでに鯛ノ浦地区には外海地方からの移住者がいたと推測され、その草分け的存在がドミンゴ松次郎の両親の与重とかおであり、中野教会(現鯛ノ浦教会)沿革の年代は寛政期(1789~1800年)だとしている。同書はまた、若城希伊子著『ドミンゴ松次郎の旅』には出津地域の水方役であった松次郎の父与重、母かお、松次郎一家の鯛ノ浦への移住を1863年(文久4年)5月と書かれていることを紹介している。しかしながら、慶応3年2月(1867年)にはクーザン神父が9日から17日までの間頭ヶ島で伝道活動を行っているとも書いている<sup>21)</sup>。移住からわずか4年という短期間で地域のキリシタンの頭目として活動し、しかも上五島

の信者の代表が大浦に出かける際には、プティジャン神父に宛てた手紙を託して神父の派遣を要請し、クーザン神父を頭ヶ島に受け入れる<sup>22)</sup>までの態勢を果たして整えることができたのであろうか。若城氏の1863年移住説<sup>23)</sup>はあまりにも遅すぎるのではないかと考えられる。いずれにしろ、頭ヶ島には江戸末期にすでにキリシタンの入植があり、彼らをカトリックに復帰させるためにクーザン神父が頭ヶ島に渡って、宣教活動を行ったと見るのが妥当ではないだろうか。

頭ヶ島への入植年代に関連するが、洗礼台帳 では洗礼番号47のMの生年は1843年であり、出生地が頭ヶ島となっている。しかしながら、この生年はともかくとして、出生地との整合性の観点からは、あまりにも早すぎると考えられる。洗礼台帳では、他の洗礼者に関しても、出生地が正しく記入されていない場合も多少見受けられることから、Mの場合も、自分の出生地が定かではないために、現住所を単に述べたことによる間違いであると考えられる。

Mの出生地に関しては不明であるが、彼の両親の出生地に関しては、ドミンゴ松次郎との関連もあり、ここで少し言及すると、Mの父と父方祖母は出津出身であり、母は船隠出身であるが、母方祖父は出津の出身である。上五島の他のキリシタン集落では、神浦や大野出身者が多く、出津出身者は比較的少ない。これに対して、頭ヶ島の開拓者やその両親、あるいはその祖父母にはドミンゴ松次郎の両親の出身地である出津の出身者が多い。これは頭ヶ島特有のことである。また、Mの両親の出身地である出津と船隠との関係についてであるが、『有川町郷土誌』には、船隠地区には明治初年、西彼杵半島の出津からキリシタンが移住したとある<sup>25)</sup>。浦川も頭ヶ島のキリシタン弾圧を逃れた信者の中には船隠に避難した家族がいくつかあったと書いている<sup>26)</sup>。それを裏付けるように、頭ヶ島の洗礼台帳には船隠出身者が少なからず見受けられる。ただし、船隠への出津からの入植の時期は、Mの生年や五島におけるキリシタン弾圧などを勘案すると、『有川町郷土誌』が述べる明治初年ではなく、江戸末期と考えるのが妥当

ではなかろうか。なお、このMであるが、その年齢から推測して、次項で述べる迫害された頭ヶ島キリシタンのうちの一人、茂市と考えられる。

### ・頭ヶ島キリシタンへの弾圧

頭ヶ島の入植初期の状況やそれに続くキリシタン弾圧について、浦川は『五島キリシタン史』の中で次のように記している。頭ヶ島では、前田一家を除く住民全員がキリシタンであったため、宗門改めもなく、安心して信仰が続けられるとの話から、頭ヶ島が天国でもあるかの如く言いはやされて、移住する者が多かった。だが、その頭ヶ島でさえも幕末から明治初期にかけて長崎全土のキリシタンを襲った弾圧の嵐は吹き荒れた。この起こりは、前田義太夫宅に出入りしていた黒崎村牧野出身の千太夫という男が頭ヶ島の住民がキリシタン宗門を念じていることを嗅ぎつけて、前田に密告したことによる。しかも、その後に不幸にも島の紺屋の市右衛門の妻がコンタスを唱えた後数珠を忘れていったのを、店の客である対岸の友住の異教徒の女性に見つけられ、ついには有川の役人の知れるところとなった。

これを受けて、前田義太夫が島民を集合させ、キリシタン宗門を奉じている者があれば打ち明けるようにと言うと、頭ヶ島の信者たちはいっせいにキリシタンであることを告白したのである。前田が有川の代官にこのことを報告すると、代官は足軽36名のほか、下代や庄屋などを頭ヶ島に差し向けた。彼らはキリシタンたちが中田権六という男の家に集まり祈っているところを取り押さえ、熊助、その子の万吉、茂市、卯助、熊造、幸右衛門、彌雄造、権六など十数人の戸主全員を縛り、翌日には彼らを友住に引き立てたのである。キリシタンたちは3カ月間拷問を受け、棄教を強いられた。彌雄造は病に倒れ、権六から洗礼を授けられた数日後に永い眠りについた。3カ月後に口先だけの改宗を申し出たことによって、頭ヶ島に戻され、松次郎の長屋が牢獄代わりとなり、そこに投獄された。福江藩の

「異宗徒改宗帖」には、作二郎、丈平、倉蔵、増右衛門、熊蔵、末松、和助、政右衛門など、8戸41人の名前が記されている。ところが、投獄された者たちは、夜陰に乗じて逃亡したのである。彼らや残された頭ヶ島の住人も船隠などの五島のキリシタン集落に逃れただけでなく、黒島や外海の親戚を頼って避難した。茂市のように、浦上に避難するつもりが、長崎で五島から逃亡してきたキリシタンであることが役人の知るところとなり、浦上キリシタンとともに、伊賀国上野に配流された者もいた<sup>27)</sup>。

## ・ 洗礼台帳 、 及び洗礼台帳 の概要

頭ヶ島の初期の開拓者たちがどのような人たちで構成されていたのか、その一部については、上記のように、浦川の『五島キリシタン史』に名前があげられているために知ることができる。しかしながら、彼らが具体的にどのような人物であったのか、またそれ以外にどのような人たちがいたのか、彼らの名前や家族関係、姻戚関係などの詳細な事項については、すでに示したように、洗礼台帳で知ることができる。頭ヶ島のキリシタンについては、洗礼台帳 、 の中では、他の集落のキリシタンとともに記されているが、洗礼台帳 は頭ヶ島のキリシタンのみの洗礼台帳となっている。それでは、それぞれどのような洗礼台帳であるのか、その概要について見てみよう。

洗礼台帳 はテオドール・フレノー神父によって1878年から1879年まで、また はフランク・ブレル神父によって1879年から1880年にかけて作成されている。ブレル神父はフレノー神父と同年であるが、来日はフレノー神父よりも遅く、1877年である。ところが、ブレル神父は、1885年に鯛ノ浦の危篤の信徒に最期の秘跡を授けるために、滞在中の出津のドウ・ロツツ神父のもとから小舟で五島に戻る途中時化で難破し海上を漂流していたところを救助されたのはよかったが、多額の金銭を持っていることが知られ、金銭ばかりか、船に乗っていた信徒12人とともに命さえも奪われ、帰

らぬ人となった<sup>28)</sup>。

洗礼台帳、はすでに述べたようにすべて手書きであるうえに、洗礼番号もつけられていない。そのため、この2冊の受洗者の実数を知るのはいきわめて困難であるが、大まかな数値を示すと、洗礼台帳の受洗者数はおよそ800人、はおよそ500人である。この数はキリシタン弾圧を経て、ようやく信仰の自由を手に入れ、カトリックに復帰できるというキリシタンたちの歡喜を表している。ただし、完全な宗教の自由というのはそれからおよそ30年後の明治32年（1899年）7月27日に出される内務省令第41号「宗教宣布に関する届出方」を待たねばならないが、それでもキリスト教関係者の宗教活動は黙許されていた<sup>29)</sup>。

1878年という、クーザン神父の宣教からはや10年が経過していた。苦難を乗り越えた五島のキリシタンたちはフランス人神父の来島を心待ちにしていた。それは3年間に1,300人の受洗、つまり五島列島全体のキリシタン6,000～7,000人のうちの5分の1がわずか3年間で受洗したことに如実に表れている。ただし、頭ヶ島の受洗者に関して言えば、その多くが洗礼台帳にも同様に記載されていることから、洗礼台帳、は、いわば信仰告白であり、仮洗礼だった可能性が高い。正式な洗礼を受けるためには、それまでのキリシタンの信仰<sup>30)</sup>とは異なり、カテキスタなどカトリック教徒に欠かせない教義の学習などの準備が必要であったことが背景にあるとも考えられる。

洗礼台帳及びは、上五島地区全域の受洗者について記載されているが、写真5及び6に示すように、受洗者の洗礼名、名前、年齢、両親の洗礼名及び名前は記されているが、のように祖父母については必ずしも記入されてはいない。限られた時間の中で、日本語も流暢に操ることができないフランス人神父たちが、多数の受洗者を前にして必要事項を聴取したうえで台帳を作成しなければならない状況においては、祖父母の名前まで尋ねて記入する時間的な余裕はなかったとも推測される。しかも、洗礼台帳以降のように定式化された記入事項があらかじめ印刷された台紙と

写真5 洗礼台帳

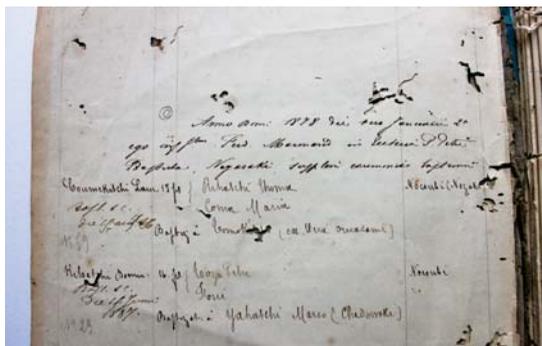


写真6 洗礼台帳



は異なり、すべて手書きのため、最低限の事項の記入に留めたということも大いに考えられる。

ところで、聴取された内容はフランス人神父によってラテン語で記されている。ところが、ラテン語で書かれてはいるものの、日本人の名前などの筆記は彼らの母語であるフランス語の音韻と綴りが大きく影響している。日本人神父など教会関係者のためだと考えられるが、日本語の五十音に対応したフランス語的ラテン語の綴りが洗礼台帳の終わりに記載されているので、写真7で示しておきたい。

洗礼台帳 は、1881年から1889年までのおよそ9年間に、頭ヶ島で受

写真7 日本語・ラテン・フランス語綴り対照表

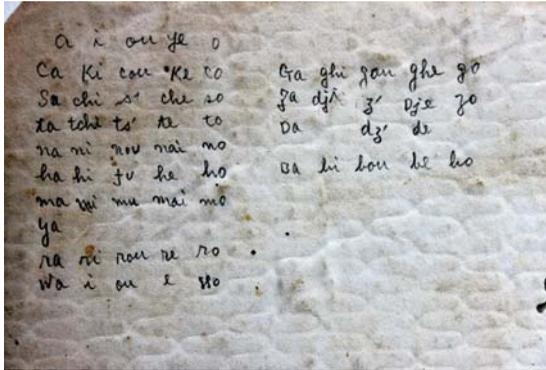
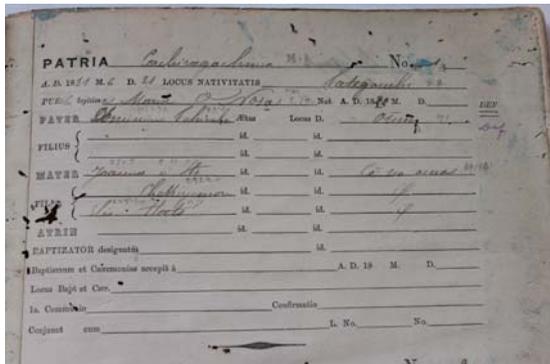


写真8 洗礼台帳



洗した113人について、地区、洗礼日、出生地、洗礼名及び名前、生年月日、両親の洗礼名及び名前、双方の祖父母の洗礼名及び名前、各人の出生地、抱き親（代父、代母とも言う）の洗礼名及び名前、授洗者名、洗礼場所が、写真8に見られるように、かなり詳細に記入されている。ただし、洗礼名と名前と地区などの必要事項だけが記入され、他の事項については空欄になっているものも見受けられる。特に、同一家族や一族が同時に洗礼を受けた場合には、それが顕著である。

また、1880年代前半はどの地区でもカトリックへの復帰を希望する人が多く、しかも神父の巡回の日も限定されていたために、1日にかなりの人

が受洗している。例えば、1881年6月21日の場合、受洗者数だけでも1日に40人にのぼっている。そのため、神父たちは事前に十分準備を整えていたとは思われるが、とにかく多忙であったために各事項の記載に十分な時間を割くことができなかつたようである。わずか数人の司祭が上五島と中五島の全域を担当しなければならず、活動範囲も広域のうえ、移動するにも徒歩と小舟しか移動手段がなかつた当時の交通事情から察すれば、キリシタンの集落を一つ一つ回るだけでもかなりの時間を要したであろうし、洗礼台帳の作成が限定的になつたのではないかと察せられる。洗礼台帳

の授洗者名から、洗礼は1881年から1884年まではブレル神父、ブレル神父の死亡後の1885年からはジャン＝フランソワ・マトウラ神父、1886年から1889年まではフレノー神父が担当している。

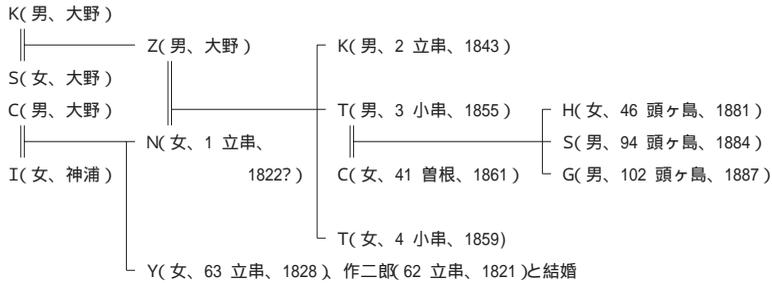
## ・ 洗礼台帳 に記された人々

無人島であつた頭ヶ島に入植し開拓していった頭ヶ島地区の初期の住人はどのような人たちであつたのだろうか。どのような経路をたどつて頭ヶ島にやつてきて定住していったのだろうか。また、彼らはどのような家族構成や姻戚関係であつたのだろうか。洗礼台帳 をもとに、彼らの家系図の作成を試みることにする。なお、洗礼台帳はラテン語で記されているので、洗礼名や名前はカタカナで表記できるが、個人情報保護の見地から、本論文では、浦川和三郎の『五島キリシタン史』等ですでに公表されている人名については漢字で表記するが、それ以外はすべてアルファベットの頭文字で表記する。また、アルファベットの頭文字で表記したことにより、男女の区別がつかないため、男/女と記すことにする。例えば、K(男、2立串、1843)と表記した場合は、「K」は名前の頭文字、「男」は性別、「2」は洗礼台帳の識別番号、「立串」は出生地、「1843」は生年とする。特に、出生地や生年は本論文が目指す目的の重要事項であり、開拓者たちの移動を知る手がかりとなる。また、家系図では は婚姻関係を、 は親

子関係を表わしている。

それではまず、洗礼台帳 で洗礼番号1のN(女)とその子供たちのK(男、同2)、T(男、同3)、T(女、同4)一家から始めることにする。

Z・N夫婦の家系

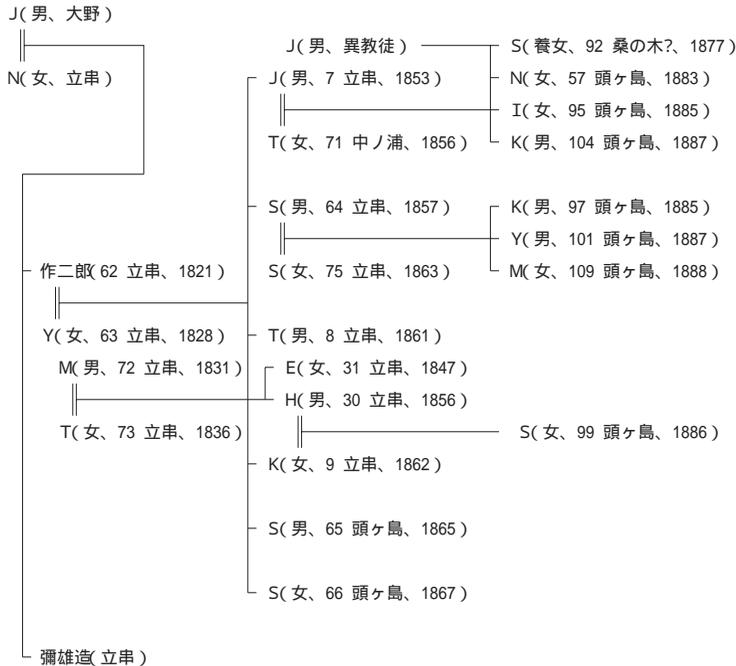


大野出身のCと神浦出身のI夫婦は、二人が結婚したのがいつの段階なのか、すなわち結婚して入植したのか、それともそれぞれが家族とともに五島に入植した後に立串で出会って結婚したのかは不明であるが、いずれにしても二人は立串に入植し、娘2人が誕生した。Nは洗礼台帳 の第1号の受洗者であり、妹Yは洗礼台帳 にも記されていることから、信仰に熱心な家族であったと考えられる。Yは洗礼台帳 にも夫とともに記載されている。ZとNの夫婦は最初に立串に入植したが、息子Tと娘Tが小串で生まれていることから、夫婦は息子Kが生まれた後に近隣の小串に移っていることが分かる。拙著「仲知小教区の開拓者たち(1) - 島ノ首、真浦、久志、一本松、竹谷 - 」<sup>31)</sup>及び「仲知小教区の開拓者たち(2) - 江袋、赤波江、米山、大水、野首、瀬戸脇 - 」<sup>32)</sup>でも示したように、外海地方から五島列島の各地に移民していった潜伏キリシタンたちは劣悪な環境に置かれていた。ほとんどの耕作地は地下<sup>じげ</sup>によって占領されていたために、彼らに残されていたのは草木生い茂る山間部の土地しかなかった。信仰ができることだけを楽しみに、開拓に精を出したが、結果が思うように出な

ければ、次の新天地を求めて移動していった。そのため、2カ所、3カ所と入植地を変えることは珍しくなかった。こうしたことが移動の背景にあった。

次は、妹Yの結婚相手である作二郎一家の家系をたどってみよう。なお、洗礼台帳の担当者がブレル神父から、マトゥラ神父を経て、フレノー神父に代わると、それまで受洗者の両親双方の祖父母の名前及び出生地が記録されていたが、簡略化されたのか、両親の名前と年齢のみが記されるようになった。

作二郎・Y夫婦の家系

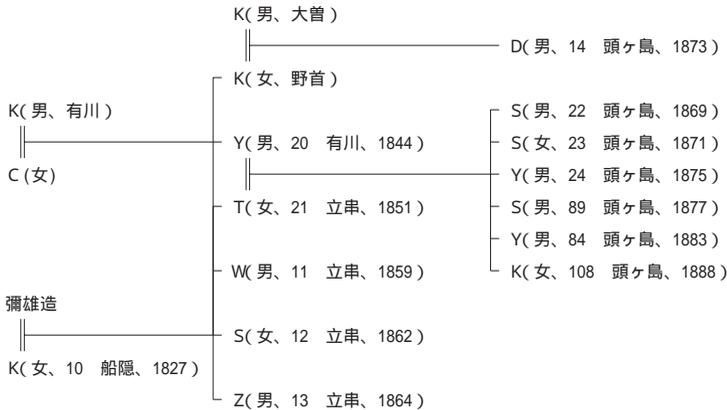


この一家は大野出身のJと立串出身のNを第一世代とする。Nの生年は不明であるが、作二郎の生年が1821年であることから、Nは1800年前後の生まれであると考えられる。このことから、Nの一家の立串入植は外海か

ら五島への公式移民の年である1797年とほぼ同年代であると推測できる。

JとN夫婦には2人の息子作二郎と彌雄造が誕生したが、作二郎は弾圧を生き延びることができた。しかし、作二郎の兄弟の彌雄造は、上述のように、有川の牢に投獄され、病気のため死亡している。ただし、彌雄造もK（洗礼番号10）と結婚して5人の子どもたちが誕生し、それぞれ受洗していることから、彌雄造・K夫婦一家を示すことにしよう。

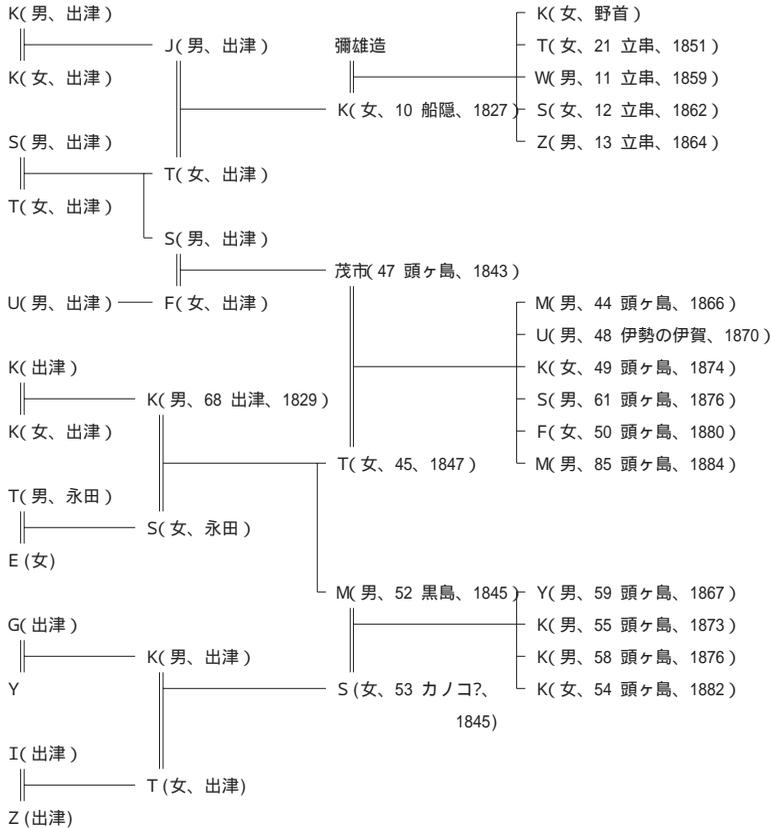
彌雄造・K夫婦家系



彌雄造とKの夫婦は、娘のKが中通島の北部に位置する野崎島の野首で生まれていることを考えると、結婚後に立串から野首に入植したと推測される。しかしながら、娘のT以降の子どもたち全員が立串で生まれていることや母親のKの年齢などから、野首での開拓は短期間で見切りをつけ、夫婦は幼い娘のKを連れて再び立串に戻ったと考えられる。

彌雄造の妻のKは船隠の生まれであるが、Kの家系や姻戚関係にある家系は、出津 - 頭ヶ島、出津 - 船隠、頭ヶ島 - 船隠の関係を明確に示すことができるので、以下に示すことにする。

K・K夫婦、S・T夫婦、K・K夫婦、T・E夫婦の家系



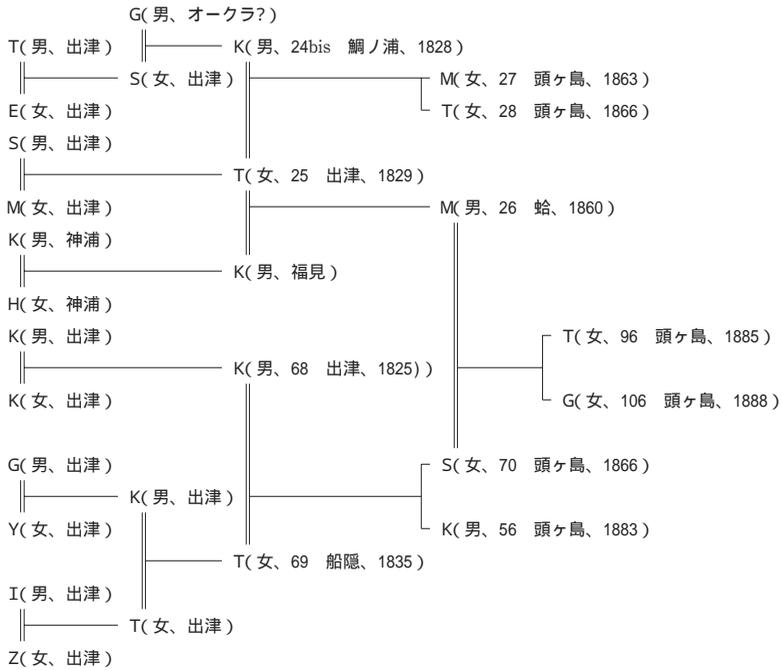
これらの家系図はK・K夫婦、S・T夫婦、K・K夫婦、T・E夫婦の4組の夫婦を祖先とし、3代にわたって展開する家系を示しているが、T・E夫婦以外はすべて出津出身者であり、頭ヶ島の開拓者の多くが出津と関係していることがこの家系図からも明白である。Tの出身地である永田も出津とは近隣関係にあり、出津と永田のキリシタンたちは互いに交流があったと考えられる。T以外にも頭ヶ島の初期開拓者の中に永田出身者が見受けられる。

洗礼番号47の茂市は、すでに述べたように、弾圧を避けて長崎に逃れた

ものの、五島札とコンタスを持っていたために五島キリシタンであることが判明し、庄屋の手に渡って、浦上四番崩れの浦上キリシタンとともに伊賀上野へと遠島された経験を持つ<sup>33)</sup>。付言すれば、四番崩れの配流は2度にわたって実施された。1回目は1867年に114名が津和野、長州萩、福山の3藩に、2回目は1870年に3,280人が20藩22カ所に配流されたが、殉教者の数も613名にのぼった。茂市が流された伊賀上野は20藩22カ所の中の一つであり、58名が流された<sup>34)</sup>。このような境遇に置かれたために、茂市の息子U（洗礼番号48、Uは洗礼台帳にも記載されている）は1870年に伊賀で生まれている。また、Uの母親はTであることから、茂市は夫婦で幼いMを連れて伊賀上野に流されたと推測される。また、浦上信徒は禁教の高札の撤去により太政官令が出て、1873年（明治6年）3月までに釈放され、4月から6月にかけて次々に帰村した<sup>35)</sup>が、茂市・T夫婦も無事帰村したようで、翌年には娘のK（洗礼番号49）が誕生している。

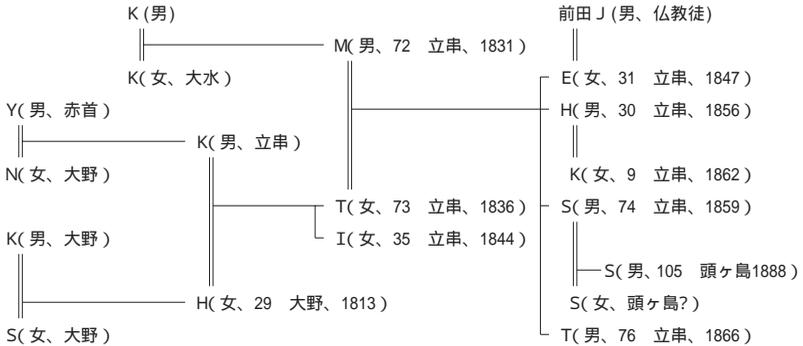
K（洗礼番号68）・S夫婦の特徴として、娘T（洗礼番号45）は生年だけで、出生地は洗礼台帳に記載されていないが、息子のM（洗礼番号52）は黒島の生まれということから、夫婦がまず黒島に入植したことがあげられる。頭ヶ島の住人で黒島経由はこの一家だけであるが、頭ヶ島と黒島の関係について浦川は、弾圧の際に逃れた集落として、船隠だけでなく、黒島や外海もあげている<sup>36)</sup>。また、このKは永田出身のSと結婚して、TとMが誕生したが、その後船隠出身のT（洗礼番号69）と再婚し、二人の間にはS（洗礼番号70）が誕生している。Sの誕生が1866年ということを考えれば、Kが黒島から頭ヶ島に入植したのは少なくとも1866年以前のことであり、頭ヶ島開拓の初期であると推測される。再婚相手のTも船隠の出身者であり、出津と船隠の関係も家系図から明白であることから、K・T夫婦の家系図も示しておく。

K・T夫婦の家系



頭ヶ島の開拓者の出身地で最も多いのは、出津である。次に多いのが大野であるが、その多くがまず立串に入植した後に、頭ヶ島に移動している。このケースの代表的な夫婦として、福江藩の「異宗徒改宗帖」にも名前が記されている<sup>37)</sup>M(洗礼番号72)とT(洗礼番号73)夫婦に関係する家系を見てみよう。

M・T夫婦の家系

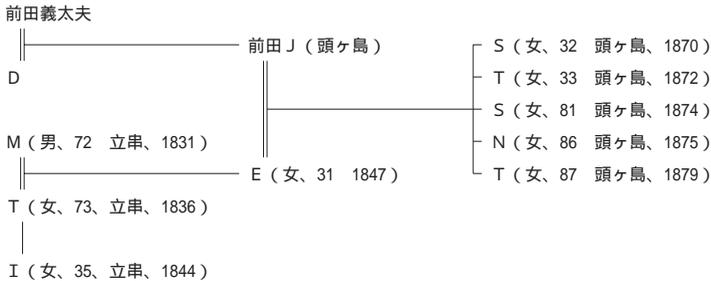


この家系で注目したいのは、Tの祖父Yが赤首出身ということである。赤首は大野と出津の間に位置する小さなキリシタン集落である。頭ヶ島には出津と大野出身者が多いが、赤首は地理的にも近い大野や出津との交流があり、五島への移住も特別なことではなかったものと推測される。ただし、Y以外に頭ヶ島関係者で赤首出身者はいない。

さて、M・T夫婦に関して若干疑問に思われるのが、夫婦と子どもたちの年齢差である。特に長女のE（洗礼番号31）と母親Tとの年齢差は11歳しかない。当時が早婚であったとしても、11歳で母親になることはほとんど不可能である。いずれかの洗礼台帳において記載に間違いがあると考えられる。

M・T夫婦の家系で特に注目に値するのが、M・T夫婦の長女E（洗礼番号31）が頭ヶ島の小役人で唯一の仏教徒であった前田義太夫の息子Jと結婚していることである。しかも、彼らの長女の誕生が1870年であることを考えれば、キリシタンに対する弾圧の直後でもあり、異教徒同士の結婚に対しては周囲からそれ相当の抵抗や反対があったと推測される。しかしながら、彼らの子どもたち全員が受洗していることから考えると、前田家は支配者であり、なおかつ仏教徒であるにもかかわらず、キリシタンへの理解もあったのではないかと考えられる。前田J・E夫婦の家系を見てみよう。

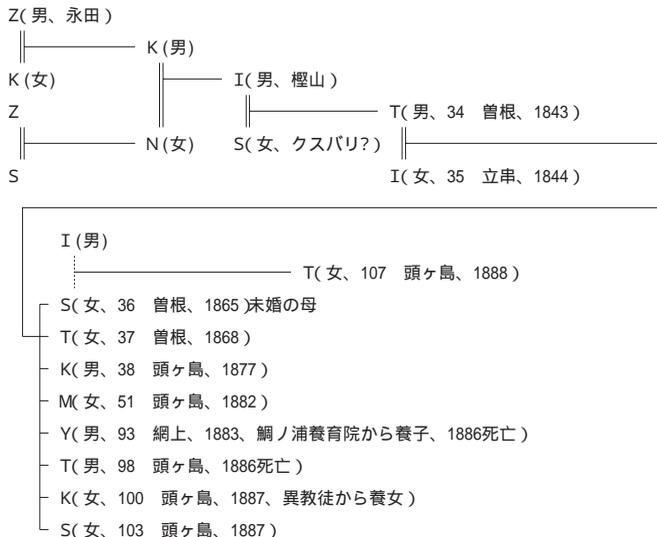
前田 J・E 夫婦の家系



アルファベット記述のため明確に示すことができないが、J・Eの長女 Sと三女 Sは同じ名前で洗礼台帳に記載されている。一方は洗礼番号32、他方は81と、洗礼番号が離れているためか、台帳作成者によって十分に確認されずに記載されてしまったものと思われる。

さて、Eの母 T (洗礼番号73) の妹 I (洗礼番号35) は、曾根出身の T (洗礼番号34) と結婚している。曾根から頭ヶ島への入植者は T 以外には、洗礼番号 5 の I だけである。それでは、T・I 夫婦に関連する家系を見てみよう。

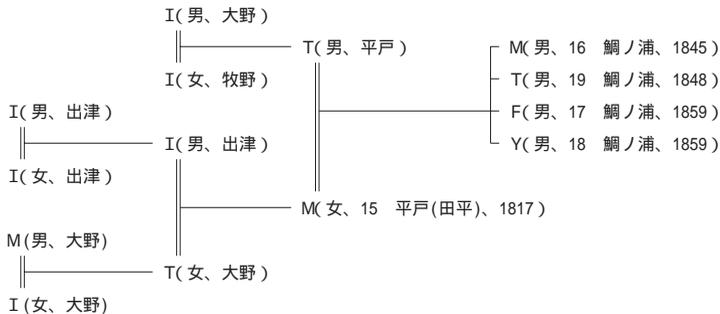
T・I 夫婦の家系



T・I夫婦は実子6人に加えて、2人を養子として迎えていることが特徴としてあげられる。他の洗礼台帳でも、養子を迎えた夫婦はあるが、その場合は、娘ばかりが誕生して息子がいないことから、家を継がせる目的で男の子の養子を迎えている。ところが、この夫婦の場合は、息子K（洗礼番号38）がすでに生まれているうえに、鯛ノ浦の養育院や異教徒からも養子を迎えている。慈善が目的であったと考えられる。Tは洗礼台帳に各事項が詳細に記入されているものの、受洗直前に死亡したものとみられ、台帳全体に斜線が引かれている。娘Sは未婚のまま、同じキリスト教徒との間に娘が誕生している。洗礼台帳は戸籍簿と同様に、このような事実も隠すことなく記載されている。

次に示すT・M（洗礼番号15）夫婦は、出津・大野出身者であるが、頭ヶ島には珍しく、平戸を經由して頭ヶ島に入植しているケースである。出津・大野出身者は、すでに述べたように、頭ヶ島には大変多い。しかも、彼らのほとんどが立串、小串、鯛ノ浦、船隠などの頭ヶ島に隣接する中通島内のキリシタン集落を經由した後に、頭ヶ島に入植している。ところが、T・Mの双方の家系ともに、第一世代や第二世代は出津や大野出身ではあるものの、平戸や田平にまず入植し、その後鯛ノ浦を經由して、最後に頭ヶ島に入植している。

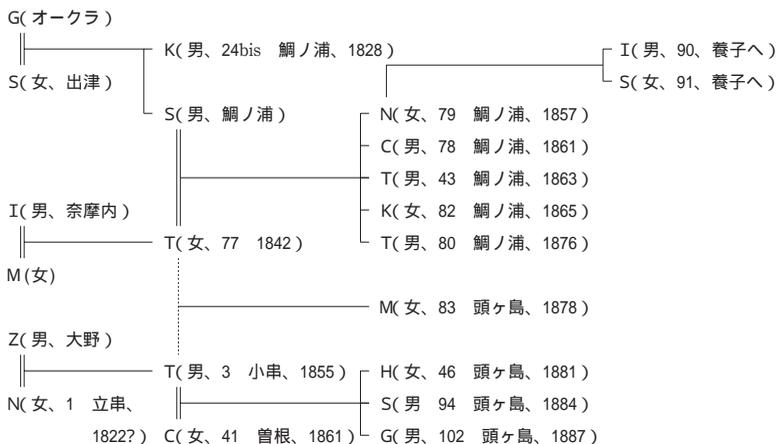
T・M夫婦の家系



T・M夫婦の息子T(洗礼番号19)の洗礼台帳には斜線が引かれているが、詳細は不明である。また、FとYは同年の誕生であるが、双子かどうかは不明である。Tの出身地はM(洗礼番号16)の洗礼台帳では平戸と記されているが、Y(洗礼番号18)の洗礼台帳には薄くマダラジマと書かれているが、同じ筆記者ではないため、詳細は不明である。ただ、<sup>まだらじま</sup>馬渡島は佐賀県呼子から船で渡らねばならない玄界灘に浮かぶ孤島であるが、確かに外海からキリシタンが渡った島として知られ、現在もカトリック教会がある。Tが馬渡島から平戸に移り、Mと出会った可能性もある。

最後に、「異教徒改宗帖」にも名前があがっているSとT(洗礼番号77)夫婦の家系を示そう。Sは洗礼番号24bisのKと兄弟の関係にある。しかしSは一家の受洗時に受洗していないことから、この時にはすでに死亡していたと考えられる。

S・T夫婦の家系



この家系は他の家系に比べると、家族の内部に若干問題をはらんでいる。S・T(洗礼番号77)の娘N(洗礼番号79)は、未婚のまま2人の子どもをもうけた後、養子に出している。I(洗礼番号90)の父親については蛤

のY（異教徒）と記されている。また、S（洗礼番号91）の父親は不明であるが、Sは鯛ノ浦の養育院に出されている。TはSの生前か死後か不明であるが、T（洗礼番号3）と関係を持ち、2人の間にM（洗礼番号83）が生まれている。しかも、TとTは13歳の年齢差がある。ただし、Tはその後C（洗礼番号41）と結婚し、3人の子どもが誕生している。いずれにしる、頭ヶ島では特異なケースである。

## ．さいごに

以上のように、無人島であった頭ヶ島にはどのような人たちが入植し、開拓していったのかを見てきた。最初の開拓者たちの中で最も多かったのは、頭ヶ島と非常に関係の深いドミンゴ森松二郎の両親の出身地である出津出身者であった。次に多かったのが、出津とも近隣の大野の出身者であった。五島列島の他のキリシタン集落が1797年の外海からの公式移民からほどなく開拓されたのと比較すると、頭ヶ島の開拓はそれよりも少なくとも50年以上も遅かっただけに、初期の開拓者たちは他の入植地を何力所か経由して頭ヶ島に到着していた。ただ、その多くは、頭ヶ島の隣の中通島に位置する開拓地であり、立串や船隠が経由地としては多かった。それでも、平戸や黒島を経由して、新天地として頭ヶ島を選んで入植した家族もあった。

現在では頭ヶ島には中通島から橋がかかり容易に往来できるようになったが、当時は中通島からは船で往来するしか方法はなく、そうした不便さがかえって役人の追及を逃れるためには幸いした側面もある。しかしながら、この不便さは、日本が経済発展する中でそこで暮らす人たちにとってはマイナス要因として実感され、島を後にする人たちの増加につながっていった。その結果、今では頭ヶ島の住民は極端に減少し、教会の周辺に数軒が残るのみとなってしまった。教会を取りまく山の斜面には家々が建っていた跡がかすかに感じられる。また、頭ヶ島教会の下にある墓地には、

幾百という十字架が立っている。いかに多くの人たちがこの島で暮らしたかを改めて思う。

## 註

- 1) H. チースクリ監修、太田淑子編『日本史小百科 キリシタン』東京堂出版、平成13年、262～264頁。那覇に滞在したフォルカッド神父らは、琉球王朝の厳しい監視下に置かれ、結局目ぼしい活動はできないまま、帰国せざるを得なかった。
- 2) 海老沢有道『キリシタン弾圧と抵抗』雄山閣出版、昭和56年、227頁。
- 3) 海老沢有道『維新変革期とキリスト教』新生社、1968年、63頁。
- 4) 明治政府は旧暦(太陰太陽暦)の明治5年12月3日をもって新暦(太陽暦)の明治6年(1873年)1月1日とした。それ以前は旧暦であるため、このように西暦の日付とはおよそ1カ月の差が生じている。
- 5) 海老沢有道『キリシタン弾圧と抵抗』前掲書、231頁。
- 6) 五野井隆文、デ・ルカ・レンゾ、片岡瑠美子監修『旅する長崎学4』長崎文献社、2006年、3頁。浦上キリシタンには「三つの伝承」が信仰のよりどころとなっていた。それは、1) 七代経ったらパードレ(神父)様がローマから船でやってくる、2) そのパードレ(神父)様は独身である、3) サンタ・マリアの御像を持ってやってくる、というものであった。ちなみに、浦上のキリシタンたちは東山手のプロテスタント教会にも行ったようであるが、牧師が妻帯者だと知り、この教会には近づかなくなったとの逸話も残されている。
- 7) 中島昭子「サンタ・マリアの御像はどこ」『日本史小百科 キリシタン』289頁。
- 8) 拙書「五島キリシタン史年表」『長崎県立大学論集』第42巻第4号、61～62頁。
- 9) 三上明美「2 明治新政府のキリスト教政策」『近代日本の形成と宗教問題』中央大学人文科学研究所編、中央大学出版部、1992年、165～189頁。宗教弾圧に関しては、海外の新聞等で報道されて、大きな波紋を巻き起こした。これらの報道の一つとしてヘラルド誌の記事について書かれた、以下の著書が参考になる。塩野和夫訳、解説『禁教国日本の報道 『ヘラルド』誌(1825年 - 1873年)より』雄松堂出版、2007年。
- 10) 『仲知修道院100年の歩み セシリア修道院よりお告げのマリア会まで』お告げのマリア修道会、1984年、8頁。
- 11) 同上書。五島列島は南北に百キロメートルに及ぶことから、当時の宣教師たちの巡回・移動の便宜などを配慮して上五島と下五島の二つの教区に分けられた。

上五島は奈留島以北であった（『仲知小教区史 信徒移住200周年記念 1797～1998』仲知小教区、平成11年、99頁）。洗礼台帳の受洗の日程をもとにフレノー神父の1878年から1879年にかけての五島巡回表が『仲知小教区史 信徒移住200周年記念 1797～1998』の98頁に掲載されているのでその一部を紹介すると、以下の通りである。2月18日桐ノ浦、2月19日中ノ浦、2月20日大平、2月22日奈摩内、2月24日曾根、2月26日江袋、2月27日仲知、3月2日野首、3月9日大浦天主堂となっている。桐ノ浦と中ノ浦は中通島に位置するが、大平は若松島にある。また、若松島の大平から中通島北部の奈摩内へ移動するのもかなりの時間を要する。当時は道路ももちろん整備されていないことから、これらの移動は多くの場合船での移動であったと考えられるが、それでも1日の移動距離は少ない場合でも数キロ、多い場合には数十キロに及んだと推測される。

12) 同上書。

13) これら2冊の洗礼台帳は新上五島町役場世界遺産登録推進室の職員2名が旧鯛ノ浦教会の祭壇横で偶然発見したものである。しかし、ラテン語で記されているために、写真の送付とともに筆者へ問い合わせがあった。表紙や内容から洗礼台帳及びである判断した。2012年10月4日に鯛ノ浦教会の烏山神父の許可を得て、写真撮影を行った。本論文の中の洗礼台帳に関する記述はすべてこの写真をもとにしている。この洗礼台帳2冊及び以降の洗礼台帳も各ページに薄く鉛筆で日本語の名前が記入されていることから、教会関係者以外ですでにこれらの洗礼台帳を調査した人がいると推測される。

14) 洗礼台帳～については、2011年3月に青砂ヶ浦教会の大山神父（当時）の許可を得て写真撮影を行った。

15) 『鯛ノ浦小教区史 鯛ノ浦教会献堂100周年記念』カトリック鯛ノ浦教会、2004年、70頁。

16) 『五島キリシタン史』前掲書、99頁。

17) 中島功『五島編年史下巻』国書刊行会、昭和48年、997頁。

18) 『五島キリシタン史』前掲書、99頁。

19) 同上書。

20) 同上書、93頁。

21) 有川町郷土誌編集・編纂委員会『有川町郷土誌』平成6年、358～359頁。なお、岩城希伊子著の正式な書名は『小さな島の明治維新 - ドミンゴ松次郎の旅』（新潮社、1982年）である。

- 22) 『五島キリシタン史』前掲書、172～173頁。
- 23) 『有川町郷土誌』前掲書、359頁。
- 24) 『鯛ノ浦小教区史 鯛ノ浦教会献堂100周年記念』前掲書、73～74頁。
- 25) 『有川町郷土誌』前掲書、360頁。
- 26) 『五島キリシタン史』前掲書、176頁。
- 27) 同上書、173～176頁。
- 28) 『鯛ノ浦小教区史 鯛ノ浦教会献堂100周年記念』前掲書、73～74頁。
- 29) 三上明美「2 明治新政府のキリスト教政策」前掲書、189頁。
- 30) 禁教以降260年もの間、司祭不在のまま信仰が続けられたことにより、キリシタン信仰は既存宗教である神道や仏教とも習合して土着化し、本来のカトリック信仰から大きくはずれていった。もちろん、その度合いは集落によって大きく異なっていた。こうしたことから、明治になってキリシタンからカトリックへ復帰することをためらう人たちが多くいた。徐々に復帰がなされたが、最終的に復帰せず、先祖伝来のキリシタン信仰に留まる人たちも少なからずいた。これらの人たちを、研究者たちは「隠れキリシタン」、「かくれキリシタン」、「カクレキリシタン」などと呼んでいるが、当の本人たちは別に隠れているわけでもないため、「古キリシタン」、「旧キリシタン」、「しのび宗」、「辻の神様」、「元帳」、「古帳」と称されるが、仲間内ではこのような名称を口にすることはないようである。このようなカクレキリシタンについては、以下の著書が参考になる。田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』国書刊行会、昭和53年。宮崎賢太郎『カクレキリシタンの信仰世界』東京大学出版会、1999年。宮崎賢太郎『カクレキリシタン』長崎新聞社、2003年。『長崎県のカクレキリシタン 長崎県カクレキリシタン習俗調査事業報告書』長崎県教育委員会、平成13年。
- 31) 『長崎県立大学経済学部論集』第44巻第3号、平成22年12月30日発行。
- 32) 『長崎県立大学経済学部論集』第44巻第4号、平成23年3月30日発行。
- 33) 『五島キリシタン史』前掲書、176頁。
- 34) 『旅する長崎学4』前掲書、7頁。
- 35) 同上書、8～9頁。
- 36) 『五島キリシタン史』前掲書、177頁。
- 37) 同上書、175頁。